編者紹介

1925年山口県生。日本大学国文科（旧制）卒。現在日本大学教授
主要著書・論文『評説牧野信一』（1966，明治書院）
『野間宏研究』（1977，笠間書院）
『現代文学の諸相』（1978，笠間書院）
「評説武田麟太郎」（1971～75，図書新聞）
共編『武田麟太郎全集』（1977，新潮社）

野間　宏　〈叢書　現代作家の世界 13〉

昭和五十三年七月一日発行

編者　薬師寺章明
発行者　谷地秀祐
印刷所　(財)大蔵省印刷局朝陽会
製本所　株式会社若林製本

発行所　文泉堂出版株式会社
住所　東京都千代田区神田神保町二―一四―六
電話　東京(03)二六五局八九八一番(代表)

(落丁・乱丁本はお取替いたします)

0395―050113―7460

野

間

宏

目　次

人と作品

野間宏、作家・作品展望　薬師寺章明　八

野間宏―文壇的出発まで　中野好夫　一三

野間宏―その生いたちと宗教　萬田　務　二六

野間宏における『歎異抄』　橋本峯雄　二八

野間宏―短篇小説の世界　森川達也　三

野間宏―長篇小説の世界　小久保　実　四六

作家・作品論

野間宏論　木村幸雄　五六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

野間宏論　藤堂正彰　七四
野間宏論　高橋和巳　八六
野間宏の『真空地帯』　三枝康高　一〇一
野間宏『さいころの空』　渡辺広士　一一三
『わが塔はそこに立つ』論　竹内泰宏　一三八
『青年の環』論　高野斗志美　一六二

回想

相手を包み込む不思議な力　羽山善治　一九四
野間さんの面影　塩浜文雄　一九七

野間宏の友情　矢野笹雄　二〇〇
『崩解感覚』の頃　埴谷雄高　二〇五
同人雑誌「三人」の成立を巡って（解説に代えて）　薬師寺章明　二〇八
略年譜　二三七
参考文献　二三二

人と作品

野間宏、作家・作品展望

薬師寺章明

作家紹介　兵庫県神戸市の生まれ。京大仏文科卒。フランスサンボリスムの影響のもとに出発、ヴァレリイ、ドストエフスキィなどをへて、ジイドに導かれマルキシズムに傾倒、学内非合法組織とも関係をもつ。京大卒業後は、大阪市役所福利課に勤務、融和事業やセツルメント事業を担当。昭和一六年応召、バターン、コレヒドール作戦に参加、治安維持法に問われ、大阪陸軍刑務所にて服役。戦後、いちはやく「暗い絵」(昭21)、「二つの肉体」(同)、「顔の中の赤い月」(昭22)、「崩解感覚」(昭23)などを発表、第一次戦後派の旗手としての不動の地位を確立。人間のエゴイズムを社会的ひろがりのなかで追求克服していく方向を示し、昭和二二年から四五年までの間に総合小説「青年の環」六部作の大作を完成、一九七二年度ロータス賞を受賞した。他に、兵営内の非人間的機構を告発した「真空地帯」(昭27)があり、「さいころの空」(昭33)、「わが塔はそこに立つ」(昭35)などの代表作がある。この間、昭和二一年日本共産党に入党、三九年除名。小説の他に評論集「文学の探究」(昭27)、「サルトル論」(昭43)、詩集「星座の痛み」(昭24)などがある。現在までの作品・評論を集めたものとしては『野間宏全集』全二二巻(筑摩書房、昭44～46)がある。

研究史の展望　少年時代の宗教との出遭いや罪の自覚との関係をも含めて、「宇宙創造」のイデーか

らサンボリスムへの開眼、詩と革命の問題、宗教とマルキシズムの問題、社会的、生理的、心理的全体小説「青年の環」六部作、八五〇〇枚の一時的挫折中断の問題、および、その文学的方法の問題等を、作者の生いたちから「暗い絵」をへて「青年の環」にいたる全業績として、その方法・内容の全体的視野から総合的に扱った論文としては、単行本として、渡辺広士『野間宏論』(審美社、昭44)、兵藤正之助『野間宏論』(新潮社、昭46)、薬師寺章明『野間宏研究』(笠間書院、昭52)などがある。

なおこのほかに、全体的展望に便利なものとしては、「わが塔はそこに立つ」から「暗い絵」への回帰を指摘して、その評価の全体的視点をとらえようとした渡辺広士「野間宏の中の〈閉ざされた自己〉(『群像』昭40・11)があり、また、野間のエッセイに引用されたマルクスの〈自然主義〉についての理解を『経済学・哲学手稿』の側から解明し、リアリズムの理論とリアリティの理論の成立の条件の相違を指示した特異な論文として安原茂「野間宏論」(『文学者』昭39・11、12)がある。他には、針生一郎「自己の絶対性と歴史の相対性」(『われらの文学』1「解説」講談社、昭41)、本多秋五「もみぬかれた野間宏」(『物語戦後文学史』新潮社、昭41)、高橋和巳「野間宏論」(『文学』昭40・2)、埴谷雄高「野間宏小論」(『垂鉛と弾機』未来社、昭37)などがあり、「座談会・戦後文学の批評と確認＝野間宏」(『近代文学』昭34・11、12)がある。

野間の文学的方向と内容を論じたものとしては、古典的なものとして、平野謙「野間宏」(『現代の作家』未来社、昭31)があり、これは、中日戦争勃発という歴史的に限定された「暗い絵」の時代背景を克明に調査・論評したものである。この問題を主として扱ったものとしては、他に本多秋五「野間宏」(『日本現代文学全集』「解説」講談社、昭40)、日野啓三「野間宏論」(『近代文学』昭26・8)などがあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

る。野間の文学の否定的側面を追求した論文としては、奥野健男「『美しい星』論」（『文学は可能か』所収、角川書店、昭39）があり、吉本隆明「戦後文学は何処へ行ったか」（『芸術的抵抗と挫折』所収、未来社、昭34）は、野間の戦争体験の内部検証の怠慢を指摘している。

今後の研究課題　個別的な問題としては、戦争中の自己批判の検討をも含む、自意識の内容の解明と、昭和二三、四年のある時期におこったコンヴージョンについての関係を明らかにすること。その過程を通じて、はじめ、戦争中の転向問題を自我の問題として実存的側面から追求する姿勢を示した野間の、フランス・サンボリスムとマルキシズム、エゴイズムとヒューマニズム、政治と性、民衆の生活意識の非合理的発想と社会科学的分析方法、非合理的文体と合理的文体、これら矛盾する各二つの対応の関係が、社会・生理・心理を含む全体小説として、二〇世紀象徴主義と一九世紀写実主義という対立した方法を駆使しながら『青年の環』において、いかに実現したかを検証することによって、その全業績の文学史的な位置の確定を行うこと。

研究の指針　「青年の環」における右の課題追究の主な論文の筆者名を列記すれば次のようである。

「青年の環」特集号（「文芸」昭46・3）、真継伸彦（「人間として」五、昭46・3）、松原新一（「辺境」四、昭46・4）、竹内泰宏（「すばる」四、昭46・5）、座談会（「文学的立場」五、昭46・7）、亀井秀雄（「群像」昭46・7）、高野斗志美・川崎彰彦・土方鉄の対談（「新日本文学」昭46・8）、津田孝（「民主文学」昭46・11）、大江健三郎（「群像」昭47・1）、杉山康彦（「文学」昭47・8、5）、尾末奎司（同、昭47・10）など。

自伝の類をのぞき、まだ伝記研究といわれるほどのものはないが、伝記研究に便利なものとしては

野間宏『鏡に挾まれて』（創樹社、昭47）がある。この書はその表題の副題に示されているとおり、野間宏の「青春自伝」である。ほぼ一九四八年ごろから一九六八年ごろにいたる間に、それぞれ別々の場所と時期に個別的に発表された、氏の自伝的要素を含むエッセイのほとんどがここに集められ、一本にまとめられたものである。収録されたエッセイに書かれた時代は、ほぼ一九二八年から一九四五年までであり、野間氏が三〇歳にいたる期間である。たとえば全体は、「わが無花果の実―若き友人におくる」を「序詞」として、小・中学校時代を中心にした「わたしの〈未青年〉時代」、第三高等学校時代を中心にした「わが青春の探究」、京大時代を中心に、卒業後、大阪市役所勤務から召集までを一括した「暗い谷間の時代」、軍隊生活・戦争体験を中心として、召集解除から軍需会社勤務をへて終戦にいたるまでをまとめた「戦争に抗して」、自己の青春体験を基盤に次代の青年の生の在り方と方向を示唆した「時代と創造の主体」の五つの大きい部立からなっていて、各エッセイは、書かれた時期や場所にかかわりなく、右の部立に応じて、そのなかに収められ整理されている。他には、富士正晴『贋・海賊の歌』（未来社、昭42）、森川達也編年譜（『現代文学大系』55、筑摩書房、昭41）などによって、その概略をつかむことができる。

（『日本近代文学必携』学燈社　昭52・1）

野間宏　文壇的出発まで

中野好夫

文学への開眼は、京都の三高へ入ってまもなく、詩人竹内勝太郎との出会いにはじまった。中学時代（大阪の北野中学）から、詩を書いたり、小説を読んだり、漠然と文学者というものになろうという考えはあったが、むろんまだはっきりした自覚ではなかった。竹内勝太郎は、三高へ入ってまもなく、友人富士正晴に紹介されて知った。竹内は、ほとんど世に認められないままに早世した詩人だが、私は今でも、本当の意味で、日本にはじめてサンボリズムの詩を確立した詩人だと思っている。私は、彼を通じて、マラルメ、ランボオ、ヴァレリー、ジッド、アランなどを知ったのだが、ことにヴァレリーの主張する「純粋詩」の意味を開眼してくれた。(一) その頃は、まだヴァレリーの詩の翻訳は出ていず、私もまだフランス語はならったばかりで、覚束ないものだったが、竹内さん所蔵の詩集『シャルム』などを借りて帰って、一心に読んだ。辻野久憲が訳した『詩の本質』が、椎の木社から出たのが、それから間もなくだったが、貪るように読み耽ったものだった。『若きパルク』を読んだのは、もう少しあとだったが、『海辺の墓』などは、夢中になって、友人に朗誦して聞かせたりした。

いったい私が、高等学校の文丙、つまりフランス語を主にするクラスを選んだというのが、中学時代愛読した谷崎潤一郎やボードレエルの翻訳の影響で、妙な話だが、自分では、この両者の文学の間

になにか関係でもあるかのような気がして入ったもので、したがって、まずはじめに私に決定的な影響を与えたのは、二十世紀のフランス文学だったといっていい。はじめは折竹錫氏が主任教授だったが、のちには伊吹武彦氏に変って、伊吹さんは、フランス文学の四大作家として、ヴァレリー、ジッド、プルースト、クローデルを挙げて、面白い紹介を聴かせてくれ、ことにプルーストの話はよく聴いた。二年か三年の時には、ジッドの日記なども教わった。マラルメは、竹内さんが選集を持っていて、借りて読んでみたが、これはどうもわからなかった。やはり同じ頃、アランの散文論の一部を、桑原武夫が、雑誌『作品』に訳出したが、これは深い感銘を受けた。

結局現代フランス文学、とりわけ象徴詩の影響は、戦後の私にもまだ続いていると思う。戦争中でも、たえずその魅力に引かれていたが、同時に一方では、ジッド、ヴァレリーが、憎くてたまらなくなったこともある。

フランス文学以外では、やはりドストエフスキー後からトルストイを耽読した。ヴァレリーと並行して読んだ訳だ。ドストエフスキーは、あとでもいうが、私たち同人仲間が、ただもう無性に憑かれていた時代があって、その小説中にあるのと同じような行動を真似てやるというような時期さえあった。[二]が、その後私は、なんとかして早くドストエフスキーと手を切らなくては駄目だと思って努力し、そしてひどく焦った時代がある。同人仲間の富士君などが、すっかり心酔しているのに、私としては妙に反撥を感じたわけだった。言葉をかえていうと、文学的天才主義に対する反撥だったともいえようか。そして私は、それに対して、努力主義というようなことを主張した時期があった。富士君などの天才主義に反撥したわけだ。

（一）なるほど竹内勝太郎は、新潮社版『日本文学大辞典』にも載っていないから、野間氏の言葉をもって簡単に紹介しておくと、「竹内勝太郎は全く日本に稀な思考力の強靭な詩人である。その出発点は三木露風、北原白秋などの日本的サンボリズムであったが、露風や白秋が中途で挫折した思想研究をおしすゝめて、独力でマラルメをきわめていた。私はおそらく日本でマラルメをきわめたといえる人は、このひとりしかいないと思う。竹内勝太郎は中学を二年のとき中途退学し、放浪生活をしながら、独力でフランス語を学び、フランスに渡り日本にはじめて、サンボリズムの詩を確立した詩人である。マラルメ、ヴァレリーの詩の系統を完全に自分のものとし、当時『明日』という詩集を出していた。勿論誰一人として彼を認めようとはしなかった。その点彼自身が非常にマラルメ的な存在であった。……私ははじめて文学、芸術に於て如何に思考力の鍛錬が大切であるかということを知った。思考推進の厳密さの重要なことを感じさされた。それと共に、愛が人生において如何に大切であるかということも教えられたのであった。私はこの人が私達弟子を愛したような美しい愛し方を、他にまだみたことがない。この偉大な人間（私はこの人を偉大とよんでいゝと思う。というのは、この人の文学的価値は、近い将来必ず再評価されるであろうから）は、芸術の根源は愛であることを私に教えたのである。……詩人竹内勝太郎は、ヴァレリーの『厳密さ』という言葉を好み、自分自身を日本におけるマラルメと考えていたようである。そして私達の集りを、ジュール・ロマンやデュアメルなどの文学修業の僧院（アベイ）の集りのようなものにしたいと考えていた。……彼は当時の日本の詩人のほとんどすべてを否定していた。三好達治を思考力のない詩人とよび、堀口大学、春山行夫をキャラメル詩人とよび、朔太郎を厳密な言葉使いを用いぬ詩人と考えていた。それと共に又、日本の小説のほとんどすべての小説を否定していた。」（『私の学生の頃』より）もって傾倒の深さ察すべきであろう。因に氏は、昭和十年、黒部渓谷で、転落、不慮の死を遂げたという。

（二）同じく『私の学生の頃』には、「高等学校二年のとき、私はドストイエフスキーに打ち込んだ。そして、それは全く、ドストイエフスキーにつかれたと言った方がよかったかも知れない。その後、いろんな人に会ってきいてみて解ったことであるが、ドストイエフスキーにとりつかれるとき陥る、あの熱狂状態を私は一年ほどつづけた。私ばかりではなく、井口、富士、桑原、皆そうであった。『地下生活者の手記』を懐に入れて、私達は街に出て行き、まるで自分が、地下室の人間の一人であると思い込んでいた。心理の分裂、二重心理、そうしたことばかりに私の頭は用いられた。学校へ行っても、妙に傲慢で、と思うと急に神妙になったりして、ほんとうにあつかいにくかったらしい。」

*

竹内勝太郎に会ってまもなく、氏の家に集まる三高の仲間、今も小説を書いている富士正晴、現在は筑摩書房の重役になっている竹之内静雄（当時は桑原姓）との三人で、『三人』という同人雑誌をはじめた。三高へ入った昭和七年の秋だった。これはむろん竹内勝太郎の指導の下に、ヴァレリー流の純粋詩ということを大いに謳ったものだった。竹之内は最初から小説だったが、富士と私は、もっぱら詩と、感想程度ではあったが評論などを書いた。（のちには、幼稚ながら小説も載せた。）今から思っても、富士君は天性詩人だった。私は身体が弱く、高等学校一年の時に結核をやり、大学卒業後もつづいていたが、結局この『三人』には、昭和十六年頃まで書きつづけた。もっとも雑誌そのものは、昭和十年竹内勝太郎が死んでからは、いったい雑誌をどういう方向に持って行くか、よく三人で議論したものだが、私自身もその頃はすでに一方では左翼関係の運動に足を踏み入れていたこともあり、同人間の見解も全く統制がなくなり、各人の意見がそのまま雑誌に反映することになった。戦争

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co